

---

# 一週間のキセキ

月見里夕夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一週間のキセキ

### 【Nコード】

N5312Q

### 【作者名】

月見里夕夜

### 【あらすじ】

少女はいじめを受けていた。だが、少女は誰にも助けを求めず、誰にも助けてもらえず、日々を過ごしていた。そんなある日のことだった。彼がこの学校にやってきたのは。

## 一日目 水曜日(前書き)

毎日更新のつもりで書きます。タイトル通り一週間書き続けます。よろしくお願ひします。さらに言えば感想ください。

## 一日目 水曜日

「和宮高校から来ました。漆島朝輝うるしまとあきと言います。よろしくお願います」

朝輝は、自分の名前を黒板に書き終え言った。

「じゃあ、漆島。お前の席は月代の隣だ」

先生が差した先には、窓儀は最後列の空いた席がひとつあり、隣の席には月代つきしろあづか有華が座っていた。有華と目が合い、朝輝は笑顔を作る。有華は戸惑った表情をした後、視線をそらす。朝輝は気にすることなく机の間を通り抜け、自分の席に座る。

「よろしくね。月代さん」

机の脇に鞆を掛けながら朝輝はそう言った。しかし、有華は緊張しているのか、浮足立った様子で頷くだけだった。

休み時間になると、朝輝はクラスメイト達から質問の山を受けることになった。内容としては、「彼女いる?」とか、「前の学校どんな感じ?」とか、よくある質問ばかりだった。朝輝はふと気付いた。隣の席に座っていたはずの有華の姿が無かったのだ。朝輝を取り巻くクラスメイト達を見渡しても、いなかった。有華は、教室の何処にもいなかった。

「どうかしたの?」

朝輝が周りを見渡す様子に気づいた一人が、怪訝そうな顔で朝輝に訊ねた。

「いや、何でもないよ」

朝輝は笑って誤魔化し、何でもないように装った。

キンコンカン……

と、そこで休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り、朝輝の周りに集まっていた生徒たちはあっという間に自分の席に着く。ガタン、という音が横でしたので見ると有華はいつの間にか教室に戻って

て、次の授業の準備をしていた。

「あれ、月代さん。何処に行つてたの？」

朝輝も教科書やノートを鞆から出しながら有華に訊ねた。

「え……。あ、その、トイレに……」

有華は恥ずかしがっているのか小さな声で答える。しかし、有華の眼は何も捉えていないように見えた。

「そう。なら、いいんだ」

「……？」

有華は、朝輝の言葉の意味が分からなかった。

昼休みになると、みんな学食や購買を食べに教室を出て行く。

「ねえ、購買つて何処にあるか知ってる？」

朝輝は、有華に購買の場所を訊ねる。

「え？ あ、えつと……」

「月代さん、ちよつといいかしら？」

不意に、髪の毛の長い女子生徒が有華を呼び止めた。

「ご、ごめんなさい……」

有華は小さく頭を下げると、女子生徒の後ろについて教室を出て行ってしまった。

「あの子は確か……。三坂さん、だっけ？」

三坂葛葉<sup>みさかかずは</sup>。長くてきれいな黒髪と切れ長の目を持つ少女。そして、何かを企むようなあの笑顔。

「あいつが……」

朝輝はさつきまでとは違う、じっと凝視するような剣幕で教室のドアを見つめた。

「漆島、昼飯食いに行こうぜ」

不意に声を掛けられ、朝輝はいつもの表情に戻って振り返る。声の主は、前の席の春日井霧杜<sup>かすがいきりと</sup>だった。

「春日井か……」

「ん？ どうした？」

「いや、何でもないよ。それよりさつさと昼飯行こう」  
「そうだな。早くしないと美味しい奴が売り切れちまうぜ」  
朝輝は霧杜と共に購買へと向かった。

午後の授業が全て終わり、放課後になった。朝輝は教科書やノートを鞆にしまい終わると、横目で有華の様子を伺っていた。

「月代さん、ちょっとお話があるのだけれど…」

不意に、有華を呼んだのは葛葉だった。

「えっ…。あ、うん…」

有華は何かをためらうように言葉を濁すが、そのまま葛葉の後ろについてドアの向こうへと消えて行った。しかし朝輝は見逃さなかった。有華の瞳の奥に「怯え」の色が映ったのを。朝輝は、二人に気づかれないようにあとをつけて行くことにした。廊下を抜け、階段を上り続ける。そして、二人が来たのは屋上へ出るドアの前の空間だった。朝輝は、階段の影に隠れ声だけを聞くことにした。

「これ、どういうことかしら？」

葛葉は、有華に何か袋に入ったものを突き出す。

「え…？」

しかし、有華は状況が飲み込めないといった風に戸惑いの声を漏らす。

「私が頼んだものと違うのだけれど…」

「ご、ごめんなさい…」

「じゃあ、次のお願いはこれね」

「…っ」

葛葉は何かをありかたに手渡し、くすくすと笑う。

「それじゃあ、また明日ね。月代さん」

上機嫌に声を弾ませ、葛葉は朝輝の存在に気付くことなく階段を下りていった。

「ふう…」

有華は小さくため息を漏らし、ゆっくりと階段を下り始める。

「あ、月代さん。どうしたの？ こんなところで  
朝輝は偶然を装い、廊下から飛び出す。

「う、漆島くん！？ どうしてこんなところに！？」

よほど意外だったのか、有華は目を大きく見開くほど驚いている。

「いや…。それは僕のセリフなんだけどね」

流石に、偶然を装った朝輝も苦笑せざる終えなかった。

「そつだ。月代さんって、家はどの辺なの？」

朝輝は自然な流れで話題を転換し、話しを逸らす。

「え！？ えつと、新居原のほうだけど…」

「じゃあ、途中まで一緒だね。一緒に帰ろうよ」

朝輝は少々強引気味な口調で有華に訊ねる。有華は目を丸くして視線を暫く漂わせた後、少し頬赤く染めて首肯した。

朝輝は有華と二人で斜光の照らす道を並んで歩いていった。有華の方をチラリと見ると、有華と目があった。その事に気づくと、有華は目をぱつと逸らす。

「月代さん。今週の日曜日って、空いてる？」

「え…？」

朝輝の質問に、有華は激しく動揺した。朝輝の質問は、恋愛ものでよくある『好きな子をデートに誘う質問の仕方』だったからだ。

「えつと、その…」

有華は、朝輝の間接的なお誘いを受けるかどうかですごく迷った。(どどど、どうしよう…。私、デートなんてしたことないし。でも、断るのもなんか嫌だし…。私、どうしよう…) そんな勝手な妄想を張り巡らせてまで悩みまくっていた。

「やっぱり、勉強とかで時間ないよね…」

朝輝は少し残念そうな表情で、俯く。

「そそそ、そんなことないよ！ 大丈夫、日曜日は空いてるよ！  
うん」

有華は慌てて口から出任せるように勢いで言いきってしまう。しかし、それは朝輝にとって計算通りの展開だった。

「そう、良かった。実は僕、街に来たばかりだからさ。街を案内してもらおうと思ったんだ」

朝輝が笑顔でそう言つと、有華は少し複雑そうな顔をする。

「そうだね。えっと、この街には意外といろいろあるんだよ」

「ふうん」

朝輝は相槌を打ちつつ、有華の手首を見る。白い手首には傷跡のようなものはない。

「どうしたの？ 漆島くん」

「え、いや、ちょっと考え事を…」

ハツと我に返ると、有華が心配そうに朝輝の顔を覗き込んでいた。朝輝はいきなりの展開にどぎまぎする。

「そう、なら良かった」

有華は安堵の笑みを浮かべ、朝輝から顔を遠ざける。

「あのさ、月代さん」

不意に、朝輝の表情からさっきまでの穏やかさが消える。

「どうしたの？」

朝輝の豹変に戸惑いながらも、平然を装って笑顔で返す。

「月代さんって、三坂さんと仲がいいの？」

「え…？」

朝輝の問いかけに、有華は酷く胸を締め付けられた。有華は下唇を噛みしめ、胸に拳を押し付ける。

「そ、そうだよ？ でも、それがどうかし」

「本当は、苛められてるんだよね？」

一瞬、有華は心臓を握り潰されたかと思った。全身から嫌な汗が吹き出し、手が震える。

「どうして、そんなことが…」

分かるの？ そう問いかけようとしたが、有華は怖くなってそれ以上口を動かさなかった。



「勿論知っているよ。君がいじめられている事だけは。だって僕は

」

朝輝は、まるで全ての真実を見透かすように笑って言った。

「君を助ける為にいるんだから」

## 一日目 水曜日（後書き）

この作品は、僕が以前書いて挫折した作品の一つのリメイクです。本当は昨日載せるはずだったのですが…。とにかく、これから一週間毎日授業そっちのけで書きますので、なにとぞよろしくお願います。さらに言えば感想をください。

追伸：体力的に毎日更新が無理なので、次の更新は土曜の夜です。すみません。これ書くたびに寝不足で、最近は午前中の授業ほとんど居眠りになってヤバいので…。

## 二日目 木曜日

朝輝は誰かと話をしていた。相手の声は聞こえてこない。

「、？」

「うん。思ってたより、深刻な状態かもしれない」

「、？」

「いや、このまま続行する。乗りかけた舟だしね」

「。、？」

「分かってるよ、そんなこと」

「、？」

「そうだね。期間中に思い出さないと…」

「。？」

「僕が死ぬ前に、どんな罪を犯したのかを」

朝、有華は目を覚ますとすぐに朝輝のことを考えていた。

朝輝は、有華がいじめを受けていることを知っていた。いや、本当は気づいただけなのかもしれない。だけど、朝輝はこうも言っていた。

「僕は、君を助けるために来たんだから」と。

その台詞を聞いて、もしかしたら終わりの見えない彼女の仕打ちに、終止符を打ってくれるのかも知れない。そんな、根拠のない想いが、有華の心の底から浮かび上がってくる。だが、有華は自身でその思考をかき消す。

「なに考えてるんだろ、私。そんなことあるわけないのに」

先生でさえ出来なかったことが、転校生なんかに出来るわけがない。それを最後に、有華は考えるのをやめる。

有華は自室を出て、リビングへと向かう。リビングに入ると、閑

散とした空気が有華を迎えた。有華はふと、ダイニングテーブルを見ると、書き置きがあることに気付く。

「おはよう有華。朝食美味しかったよ。お弁当ありがとう。いってきます。」

追伸、今度の日曜日には休みがもらえたから、お母さんのお見舞いに行こう。父より」

父からの書き置きにはそう書かれていた。

「日曜日…」

しかし、日曜日には朝輝に街を案内する約束があった。

「どうしよう…。やっぱり断るしか…」

だがそこで、有華の中の何かが踏みとどまった。それは恐怖。朝輝に嫌われることに対する恐怖だった。

「大丈夫。ちゃんと話せば分かってくれるよ…」

そうは言ったが、有華自身そんな根拠は何処にもなく、有華の心は止まりそうなコマのようだった。

有華は適当に朝食を済ませ、学校へ行く支度を始める。

「あ…これ」

教科書やノートの入替えをする際、ヒラリと一枚の紙片が落ちる。それは、昨日葛葉から渡されたメモだった。内容は今日の昼食のパンについて。

「……………」

有華はそれを再び鞆に仕舞い、準備を続けた。しかし、その眼には、悲哀の色が深く漂っていた。

「おはよう。月代さん」

登校中、有華の背後から誰かが声をかける。振り返ると、相手は果たして朝輝だった。

「おはよう、漆島くん。あの、日曜日のことなんだけど…」

有華は、意を決して日曜日の約束を断ろうと話を切りだす。

「ん？ 日曜日がどうかしたの？」

訊ねる朝輝に、有華は本当に断つていいのか戸惑う。

「えっと……。その、た、楽しみだね」

有華は苦しそうに笑顔を作った。なに言ってるんだろって私といった気持ち顔にありありと出ていた。

「…本当は、日曜日に大事な予定が入ったんでしょ？」

「え……？」

柔らかな笑みを浮かべる朝輝を見て、有華は困惑した。

「大丈夫だよ。僕は月代さんに案内してもらおう側だし、案内人に急用が出来たなら、それはしょうがないよ。それに、街の案内はいつでもしてもらえるしね」

朝輝のその優しさに、有華は涙がでそうになった。

高校生になって、少なからず友達はいた。でも、いじめを受け初めて以来友達がいなくなった有華には、朝輝のその優しさがうれしかった。

「うん、ありがとう。じゃあ、また来週の日曜日に行こうね」

「うん」

約束を来週に引き延ばし、有華は朝輝の先を走っていった。

「……………」

朝輝は、有華の背中を鋭い眼差しでじっと見据えていた。

「よつす、朝輝。重役出勤か？」

「そんなに遅くないだろ？ 単に春日井が早いだけだよ」

教室についた朝輝は、ショートホームルームSHRが始まるまでの間霧杜と駄弁ついていた。

「なあ、昨日のアレ見たか？」

霧杜はにやりと笑って、朝輝に訊ねる。朝輝は首を少し傾げ、「ああ」と思い出す。

「アレね。ごめん、まだ見てないよ」

昨日のアレとは、霧杜がお気に入りアニメの事である。どうも魔法少女が自分の不遇の人生を健気に乗り越えていくらしい。

「何だよお。これじゃ、熱く語り合えないじゃねえか」

「ごめん。この学校の授業が前の学校より少し進んでるからさ。勉強しないといけないって行けなくて…」

不満を漏らして唇を尖らせる霧杜に、朝輝は申し訳なさそうに謝る。

「げ、マジかよ。真面目だなあ朝輝は」

霧杜は、朝輝が真摯に謝る事より、真面目に勉強に取り組んでいるという事の方が気になったようだ。

「まあ、僕としては乗り気じゃないけどね。でも、両親がいい大学に行けるように勉強しろってうるさくて…」

苦笑いする朝輝に、霧杜は眉間にしわを寄せて、

「ああ〜分かるわ。俺んちのも似たような事言ってるんだよ。ま、俺は完全拒否だけだな」

と言っただけも頷く。

キンコンカコン…

「おっと、タイムリミットのようだな」

「そうだね」

二人は話を打ち切り、先生が教室に入ってくるのに合わせて前を向く。

「……」

隣を見ると、さっきまでいなかったはずの有華が、顔を俯かせて静かに座っていた。

「うあ〜。今日は午前中が長いな、オイ」

午前中の授業が終わり、昼休みがやってくる。

「うっし。朝輝、昼飯食いに行こうぜ」

「あ、うん。ねえ、月代さんも一緒に食べない？」

そう言った瞬間、二人の空気が一瞬だけ凍りついた。原因は知れていた。

「あ、ああ、そうだな。よし、月代も一緒に昼飯食べようぜ」

霧杜は空気を取り持とうと笑顔を作って有華に訊ねる。

「え…あ、うん」

有華は俯いたまま、歯切れの悪い返事を返すだけだったが、とりあえずは承諾してくれた。

「よし、じゃあ行こうか」

朝輝は、二人の微妙な空気を振り払って食堂へと向かった。

「……………」

そんな三人を陰から見つめる一つの影があっただが、当然三人とも気づくことはなかった。

「なあ、何であいつを昼飯に誘ったんだよ」

学食の順番待ちをしている間、唐突に霧杜は訊ねてきた。因みに、有華には場所取りを任せている。

「何でって…。クラスメイトだし、席近いし」

分かっていない朝輝に、霧杜は「駄目だこいつ」といった具合で額を押さえて呆れのポーズをとる。

「はあ…。でも、しょうがねえか。アレを知らねえんじやな」

「あれ？」

朝輝が訊ねると、霧杜は重々しく口を開く。

「あいつは、イジメられてるんだよ。しかも、相手のたちが悪い」

「たちが悪いって？」

「相手は隣のクラスの三坂葛葉。俺達の学年のトップだ」

トップというのは成績の事を言っているのだらうと思ひ、朝輝は相槌を打たなかった。

「成績優秀、スポーツ万能、おまけに美少女と来た。さらに、先生からの人気も高い。だから、先生たちはあいつを疑わない。しかも、あいつは月代の弱みを握っているらしい」

「そう、なんだ……………」

抑揚のない相槌に、霧杜は朝輝を見る。朝輝は、この世のものは思えない程冷やかな眼で何かを見ているようだった。

「ど、どうした？ 顔、怖いぞ？」

「ん？ ああ、ごめん。ちょっとね……」

霧杜の言葉で我に返った朝輝は、苦笑いでその場を誤魔化す。

「おっと、順番か…。日替わり定食Bセットひとつ下さい」

自分の順番がやってきたのに気付くと、霧杜は一旦話を打ち切り、食券を出して注文する。そして、霧杜の昼飯が来る間に話しを続ける。

「とにかく、今回は仕方ないが、これからはあいつにあまり関わらない事だな。本人としても関わってほしくないらしいし」

霧杜はそう言っ、肩をすくめておどけて見せる。

「そう。でも、僕はそういうわけにはいかないから」

「は？ なんだそりゃ？」

唐突に奇妙な事を口走る朝輝に、霧杜は目を丸くする。

「放っておくわけにはいかないんだよ。でないと、月代さんはいつか死ぬ」

いつか死ぬ。朝輝の言葉に、霧杜は息を呑む。

「あいよ。日替わり定食Bセット」

と、そこで食堂のおばちゃんが頼んだものを運んでくる。

「あ、僕は冷やしうどん二つで」

食券を二枚出し、食堂のおばちゃんに朝輝はにこっと笑って見せた。

「あれ？ 月代さんは…？」

さっきまで席取りをしていたはずの有華は、忽然と食堂から姿を消していた。

「どうやら、ヤツにお呼ばれしちまったみたいだな…」

霧杜は、苦虫をかみつぶしたような表情で呟いた。その言葉に、朝輝も表情を曇らせる。

「僕、月代さんを探しに行ってくるよ」

朝輝は、二つの冷やしうどんをテーブルに置いて、何処かへと行くこととする。



「ちょっと待てよ！ 当てかなんかあるのか!？」

そんな朝輝を、霧杜は慌てて制止する。朝輝も、当てが無い事を指摘されその場に思いとどまる。

「漆島くん、春日井くん、おまたせ」

突然、背後から声を掛けられ二人は振り返る。立っていたのは、さっきまで何処かに行っていたはずの有華だった。

「つ、月代さん？ 何処行つてたの？」

「あ、えっと、ちょっとトイレに……」

照れくさそうにはにかむ有華に、二人は安堵のため息を漏らす。

「ああ〜びつくりした。急にいなくなつたから慌てたぜ」

霧杜は何ともなさそうな有華を見て、安堵の笑みを見せる。

「ごめんなさい。すぐ帰つて来られると思つたし……。その、言うの、恥ずかしかつたから……」

目を伏せて、頬を赤らめて恥ずかしがる有華は、反則級の可愛さだった。

「ぐお……。俺の中の判断基準がブレていく……」

相当効いたのか、霧杜は奇妙な呻き声をあげていた。

「でも、良かった。月代さん可愛いから三年生の先輩にナンパされて連れていかれたのかと思つたよ」

朝輝は冗談交じりにからかうと、有華は顔を真っ赤にして反論する。

「そそそ、そんなことあるわけないでしょ！ そんな、可愛いからつて……」

途中から失速してもじもじし始める有華の様子を、朝輝はニヤニヤと眺めていた。

「お前つて、意外とSな所があるんだな……」

朝輝の隣では、悩殺ダメージをどうにか回復した霧杜が溜息をもらしていた。

愉快的な昼休みと、睡魔が潜む午後の授業を経て、ようやく三人は放課後を迎えた。

「うっしあ！ 俺は、自由だ　　！！！」

古臭いモノマネで現在の感動を表現している霧杜をよそに、有華と朝輝は二人仲よく話していた。

「じゃあ、一緒に帰ろうか。月代さん」

「うん、良いよ」

「ちよつと待ったあああああ！！　お前ら何でそんなに仲が良いんだよ！」

二人だけの世界と化していた空間に、霧杜が壁をぶち破る感じに割り込んでくる。

「何でつて。席も近いし、登下校も同じ方面だし」

朝輝の何気ない返答に、霧杜はがくりと肩を落として崩れる。

「畜生…。俺は別に羨ましくてこんなに落ち込んでるわけじゃねえぞ、このリア充が」

完全に言ってる事とやってる事が一致していない霧杜に、二人は顔を見合わせて苦笑いをする。

「くそう…。おい朝輝！　これ以上のリア充を俺に見せたら、轢き殺すぞ！」

そんな捨て台詞を残し、霧杜は自分の荷物を背負って教室を飛び出していった。

「…帰ろうか、月代さん」

「…そ、そうだね」

暴走する霧杜を前に、二人はもうたじたじだった。

有華はこの、二人並んで歩く時の沈黙が嫌いだった。理由は、単純に気まずいから。何か言わなきゃと思っても、何を言えばいいかわからない。そんなもどかしさが、有華は好きじゃなかった。

「月代さん、昼休み本当三坂さんに呼ばれてたんだよね？」

唐突かつ平然とその話題を切り出してくる朝輝に戸惑いながらも、

有華は頷いて答える。

「……う、うん」

有華はただ、二人に心配をかけたくなかったただけだったのだ。自分が暗い顔で帰ってくれば、二人は当然心配する。そうならない為に明るく振舞っていたが、朝輝にはお見通しだったようだ。

「月代さん。僕はもう月代さんの友達なんだから、もう少しは頼ってくれていいんだよ？」

笑顔でベタな台詞を言う朝輝だったが、その言葉は、有華の心にとっても響くものだった。

「うん。ありがと。ごめんね」

涙が出そうになるのを必死でこらえ、有華は笑顔で返した。

「じゃあ、僕はこの辺だから。また明日ね」

「うん、また明日」

十字路に来たところで、二人は別れを告げてそれぞれの家へと帰る。朝輝が振り返ると、有華が栗色の綺麗な髪を弾ませて歩いているのが見えていた。

## 二日目 木曜日（後書き）

すみません。書きあがらなくて日付跨ぎました。毎日更新って、結構きついですね（まだ始めたばかりじゃん）。まあ、とりあえずなるべく日にちを跨がないように気をつけるので、これからもよろしくお願いします。感想をくれると日付をまたぐ確率が下がります。寂しがり屋なので、どうかお声をかけて頂ければ…いいなと思います。では、乞うご期待。

### 三日目 金曜日

今更かもしれないが、朝輝は一度死んでいる。と言っても、死ぬ前は漆島朝輝ではなかったのだが…。一度死んだ彼は、生前に罪を犯した。彼は、地獄に落とされる代わりに、とある契約を交わした。それは、一週間以内に月代有華の命を救う事。もし救えれば、彼の罪は完全に償われたことになる。だが、もし救えなければ、永遠に地獄で苦しむことになる。

人によつては無謀とも思えるこの契約を、彼は交わした。そして、漆島朝輝という存在としてあの世の果てから帰って来たのだ。

カーテンの隙間から射し込む光が朝輝の瞼の上に射し込む。

「う…ん」

朝輝は重い瞼を開け、ゆっくりと体を起こす。

「三日目…か」

切っても切れず、忘れようにも忘れられない現実が、朝輝の上に重くのしかかる。朝輝は、それを深呼吸と共に一気に呑みこんでベツドから降りる。

「これ以上、何も起こらないでいて欲しいな」

家を出て、通学をしばらく歩いていると、有華の後ろ姿が目にとまった。

「おはよう、月代さん」

朝輝はいつもの調子で有華に声をかける。

「あ、漆島くん。おはよう」

立ち止まって振り返った有華は、笑顔で挨拶を返した。心なしか、少し声が弾んでいるような気がした。

「今日はご機嫌みたいだけど、何か良い事でもあった？」

朝輝が質問すると、有華は笑顔で答えてくれた。

「昨日、お母さんと電話でお話したの。あ、私のお母さんは病気で入院してて、時々電話でお話ししてるの」

それでか。と、朝輝は思った。

「月代さんって、お母さんの事が大好きなんだね」

母親の存在を忘れてしまった朝輝にとって、有華の様子はとても微笑ましいものだった。

「あ、その、えへへ…」

有華は照れくさそうに笑って頭を掻く。

「っー!!」

だが、朝輝は気付いてしまった。左手首に巻かれた包帯の存在に。「月代さん。その怪我、どうしたの？」

朝輝の顔からはさっきまでの優しい笑みが消え、僅かに青ざめていた。

「あ、これ？ 昨日、晩御飯作ってるときに切っちゃって」

有華は朝輝の問いかけに苦笑して答える。しかし、それが完全なる嘘である事が、朝輝には分かっていった。料理で包丁を扱っていたなら、普通なら手首を切る事なんてありえない。だから、その怪我がなんであるかは一つしか考えられなかった。

「そう、なんだ。大事に至らなくて良かったね」

朝輝は苦しい中、無理矢理笑うように笑った。

「うん。ごめんね。変な心配かけて」

変な心配。多分、有華もその事に対する懸念があると思ったのだろう。

「大丈夫。そんなんじゃないから。ほら、急がないと遅刻しちゃうぞ」

有華はそう言って元氣よく走り出す。

「もう、彼女は限界なのかもしれない」

有華の背中を見て小さく呟き、朝輝は有華の後を追った。

教室に入ると、霧杜は机に足を乗つけてだらけていた。

「あゝ。暑いな今日も…。そう思わないか、朝輝」

しかも何故か、夕方でもないのに黄昏ていた。意図せずして、朝輝のマイナス感情を和らげてくれる霧杜の存在は、有り難いものだった。

「今日はそんなに暑くないじゃん。ダラケすぎでしょ」

朝輝は苦笑いして、霧杜の様子を眺めている。

「うるせえ。俺はお前と違って体感温度が高いんだよ」

その時、ガラリと教室の扉が開き、担任の先生が入ってくる。

「うえ！？ マジかつ！？」

いつもはチャイムより遅く入ってくるはずの担任が、今日に限ってチャイム前に入ってきて来た。慌てた霧杜は急いで足を降ろそうとするが、足を引つ掛けてそのまま机を倒す。

「痛つてえええ…」

霧杜は腰を思い切り打ちつけ、腰をさすっている。

「おい、春日井」

いつの間にか、先生は霧杜の目の前に仁王立ちしていた。これには流石の朝輝も驚く。

「な、何でしょうか先生…」

霧杜は、さつきまで以上に汗をだらだらと流し、ひきつった笑顔でとぼける。

「分かつてるよな？ 春日井…」

先生は廊下を親指で差し、宣告する。

「SHR終わるまで廊下に立ってる」

「うおあゝあゝあ。今週残すところあとわずかで休みだああ！ ああ、でも休みが終わったらまた学校が……」

霧杜はテンションが上がりそうだが上がない微妙な呟きをして、大きく伸びをする。

「じゃあ、月代さん。食堂行こうか」

例によって、朝輝は霧杜をスルーして有華を昼食に誘う。霧杜は一瞬またかよ、という顔をしたが、一度昼食を共にした事で抵抗が無くなったのか、直ぐにいつもの調子で言った。

「うっし。なら早く行こうぜ。美味い飯が無くなっちまう」

霧杜は立ち上がったって、熱弁をふるうがごとく拳を胸の前でグツと握る。

「あの、私今日は図書委員の当番だから。今日はごめんなさい」  
有華は申し訳なさそうにそう言った。

「そっか。しょうがないね。じゃあ、頑張ってるね」

朝輝は有華へ気づかいの言葉を掛ける。

「うん、ありがとう。ごめんね」

有華はそれだけ言うと、教室を小走りで行った。朝輝はその背中を見えなくなるまで見送った。

「んじゃ、行くか」

「うん…」

朝輝は後ろ髪引かれるような思いで、食堂へと向かった。

朝輝は冷やし中華を頼み、霧杜はカレーを頼んで、注文の品を受け取った二人は丁度空いていた席に向かい合うように座る。

「で、何か言いたい事があるんじゃないのかよ。お前」

唐突に、向かい合って座っていた霧杜がカレーを一口食べて言った。

「え？ なにが？」

朝輝はいきなりそう言われたので、最初は何の事だか分からなかったが、直ぐに霧杜の意図が分かった。

「なにがじゃねえよ。朝からずっと元気ねえし、月代の事ずっと気にしてるみたいだし」

「別に、何でもないよ」

霧杜が介入したところで、どうにかなる問題ではなかった。でも、



協力してほしかった。迷った挙句、朝輝は霧杜を巻き込まない方針を選んだ。

「何でもなくねえよ。お前が月代の事で奔走してるのは知ってるんだから、さっさと話して楽になりやがれ」

霧杜は、何処かの刑事が犯人に事情聴取するときみたいな台詞で朝輝を諭す。ふざけた言い方だが、霧杜の目は真剣そのものだった。こうまで言われて、折れないわけにはいかないな。そう思った朝輝は重たいその口を開く。

「じゃあ、月代さんの左手の怪我、見た？」

「ああ。でも、それがどうかしたのか？」

朝輝は一度息を呑み、空気を深く吸い込んで、低い声で言った。

「アレは多分、リストカットの怪我だ」

「っ!?!? …マジかよ」

この事実には、霧杜も動揺を隠せなかった。どうにか声を押しとどめた霧杜は、声を低めて訊ねる。

「それって、相当ヤバくねえか？」

「ああ、このままだと危険だ。一刻も早く何とかしないといけないけど…」

そこまで言って、朝輝は俯く。

「打つ手なし。ってわけか…」

霧杜の言葉に、朝輝は頷く。

「でも、悪化を防ぐくとなら出来るかもしれない。そこで、春日井に頼みがあるんだ」

「焦らすな。さっさと言え」

霧杜は朝輝の言葉を一字一句疑うことなく真摯に受け止めていた。朝輝にとって、それはとても心強い事だった。ああ、彼に話して良かったと、朝輝は心の底から思った。

「月代さんの友達として、月代さんを支えて欲しいんだ」

真剣な表情で朝輝は言った。霧杜は一瞬呆気にとられた後、何故か笑い始める。

「何を頼むかと思えば…。いいか、俺はお前も月代も大事な友達だと思ってる。覚えとけよ？」

「っ!!!」

霧杜の台詞はベタだったけれど。否、だからこそ、朝輝の心にしつかり響いた。

「それと、俺の事は霧杜でいい。いいな？」

霧杜は不敵に笑って、朝輝を見る。

「ああ。ありがとう、霧杜」

霧杜という存在がいる事の心強さを、朝輝は初めて感じた。

「さて、基本俺も支えてやるけど、一番近くで支えてやれるのはお前だ。頑張れよ」

「何かあった時は、頼むよ霧杜」

「さ、昼飯さつさと食おうぜ。美味しい飯が冷めちまう」

霧杜は笑ってカレーを頬張り始める。

霧杜のお陰で、朝輝はある決断をしたのだった。

「月代さん。僕、今日ちょっと用事があるから先に帰ってきてくれな  
いかな？」

放課後、朝輝は帰り支度を整えている最中の有華にそう告げた。

「あ、うん。分かった、先帰ってるね」

有華はにっこり頷くと、鞆を持って教室を出て行った。

「…さてと、そろそろ白黒ハッキリさせないとね」

朝輝は鞆を勢い良く掴みあげると、教室を飛び出して屋上へと向かった。

朝輝は一人、屋上で待っていた。相手は当然、三坂葛葉だ。不意に屋上の扉が開き、女子生徒が一人やって来た。その女子生徒は果たして葛葉だった。

「話って何かしら？　もしかして、告白？」

葛葉はクスクスと笑って朝輝を挑発する。

「ふざけるな。お前も分かっているだろう。月代さんの事だ」

今までとは違う冷たく鋭い雰囲気、葛葉は一瞬驚く。しかし、またすぐにいつもの冷たい微笑を浮かべる。

「私のオトモダチである月代さんがどうしたというのかしら。もしかして　」

「もう、いい加減にしろよ」

長髪を再度繰り出そうとする葛葉を、朝輝は遮る。ピリピリとした空気が屋上全体に充満している。いつ何が起ころしてもおかしくない状況だった。

「何を、いい加減にするのかしら？」

「当然、月代さんを苛めるのをだ」

朝輝がそう言つと、葛葉はお腹を抱えて笑い始める。

「っふふふ…。私がいつ何処でどうやって月代さんを苛めたというのかしら？　第一証拠なんてあるわけ　」

「あるって、言ったらどうする？」

「っ！！」

ここで朝輝は一つの賭けに出た。本当は、物的証拠など朝輝は持っていない。だが、目撃だけはした。それが、葛葉にどれほどのダメージを与えられるかがカギだった。

「そう、なの。なら、その証拠とやら見せて頂戴」

今だ。朝輝はそう思った。朝輝はポケットから自分の携帯電話を取り出し、それをちらつかせる。

「その携帯が、一体なんだって言うのかしら？」

「水曜日の放課後、お前と月代さんを尾行させてもらった。その時の会話の一部始終を録音させてもらった」

にやりと笑って、朝輝は葛葉の出方を伺った。葛葉は、下唇を噛みしめたまま顔をしかめている。どうやら吉と出たらしい。

「あゝあ、バレちゃったか。でも、もう遅いの。何せ、私の目的は



### 三日目 金曜日（後書き）

初めに言わせて下さい。すみません。

昨日載せるはずだったのですが、寝落ちしてしまって…。

一日空いてしまいました。が、これからはしっかり書きますのでよろしくお願いします。どうか見捨てないでください。

四日目 土曜日 前半（前書き）

土日は本筋から一線おいた息抜きです。特に深刻な事態は起こりません。

## 四日目 土曜日 前半

「朝輝ー！ 起きてるー？」

朝。僕は母さんの呼び声で目を覚ます。母さんと言っても、違った意味で本当の母さんではない。そもそも僕が漆島朝輝ではないからだ。本物の漆島朝輝は階段から転落して死んだ。今の僕はその体に乗っ取っているにすぎない。

「今起きたところ。どうしたの、母さん」

僕は自室を出て階段から一階を覗き込む。見ると、母さんはキャリアウーマンみたいにビシッとスーツを着ていた。まあ、実際にキャリアウーマンなのだけけれど。

「お母さん。これからお仕事行ってくるわね。お昼には戻ると思うから」

母さんはそれだけ言い残すと、玄関のドアを開けて出勤してしまった。家の外で、車の遠ざかる音が聞こえる。

「さて、何をしようかな……」

僕は転校したばかりで部活には所属していない。多分、これからも入るつもりはないけど。

誰かと遊ぼうかと考えたが、生憎転校したてで友達も少なく、肝心の霧杜は、意外な事にバスケット部で、今日はその練習試合があるという。タイミングが悪い。

「そつだ。月代さんに電話しよう……」

僕の目的は、あと三日で月代有華の命を救う事。そのために、月代さんと親睦を深めるのも良いだろう。それに、月代さんに会いたいし。

「でも、携帯の番号知らないや……」

仕方なく、僕は戸棚から学校の連絡網を引っ張り出し、月代さんの自宅に電話をかける。

「あれ、もしかして迷惑かも知れない？」

呼び出し中にそんな事を思ってしまった、落ち着かない心境で呼び出し音を聞き続けた。運がいいのか悪いのか、電話に出たのは留守番電話サービスだった。

「月代さんもダメか…」

『そんなにのんびんだらりんしていいのかにゃー？』

急に、何処からかそんなふざけた声が聞こえてくる。またあいつか。僕はそう思った。声の主は見えない。でも、僕が契約を交わした相手。自称死神の使い魔。

「別に、僕だつて何にもしてないわけじゃないさ」

でも、今日明日は月代さんと会えないから打つ手がなかった。

『…そんな憐れな君に、ボーナスタイムだにゃー』

自称使い魔は、奇妙な事を言い始めた。

「ボーナスタイム？」

『お前が通う高校近くの喫茶店に行つてみる事だにゃー。にゃははははは…』

やがて笑い声が遠ざかり、遂には聞こえなくなった。

「何なんだよ。今の…」

全くわけが分からなかった。しかし、打つ手がない以上どんな手でも試してみる価値はある。藁にもすがる思いというやつだ。

僕は直ぐに出かける支度を整え、自称使い魔の言っていた喫茶店へと向かった。

喫茶店までは、家から十分もかからなかった。看板には『喫茶

AKABA』と書かれている。僕はゆっくりと喫茶店の中へと入ると、ドアについていたベルがカランと音を立てて僕の来店を店内に告げる。内装は、洋風で結構しゃれた造りだった。そして、カウンターに座っていたウエイトレスさんが、僕の来店に気づく。

「あ、いらっしやいませ。って、漆島くん!？」

そのウエイトレスさんは、僕を見るなり飛びあがりそうなほど驚く。しかも、僕を知っているらしい。僕は目を凝らしてウエイトレ



スさんを良く見てみる。

「もしかして、月代さん…?」

僕の目の前に立つウエイトレスさんは、間違いなく月代さんだった。この時、自称使い魔が言っていたことがようやく分かった。

「ねえどうして漆島くんがここにいるの!？」

月代さんは気が動転してるのか、ものすごい勢いで僕との距離をグイッと詰めてくる。羞恥に潤んだ瞳が、じっと僕を見つめてくる。「えっと…。気まぐれ? ていうか、それを言うなら月代さんこそ何でここでバイトしてるの?」

僕が問い返すと、月代さんは酷く狼狽して数歩下がる。視線が定まらず、ずっと泳いでいる。

ウエイトレス姿の月代さんの照れ顔は、いつもの五割増しかも知れない。この場に霧杜がいたら泣いて喜ぶだろう。

「こら、有華。お客さんを立ちっぱなしにさせちゃダメだろ?」

カウンターに立っている店主らしき女性が、月代さんに助け船を出す。

「あ、はい。その…どうぞこちらへ」

僕は月代さんに促され、奥の席に座る。

「その…。し、失礼します…」

そのままカウンターへ戻ろうとする月代さんを僕は咄嗟に引きとめる。

「あ、アイスコーヒーひとつ。ブラックで」

喫茶店に来たのに何も頼まず、ただ座っているのも何だか変なので、僕はとりあえずコーヒーを注文した。

「か、かしこまりました。少々お待ち下さい」

月代さんはペコリと頭を下げて、カウンターへと戻っていった。

「月代さん、ウエイトレス姿結構似合ってるな…」

どうしよう…。漆島くんこんなところ見られちゃった。予想外の展開に私はもうどうしたらいいか分からなかった。他のクラスメ

イトや私を知っている生徒なら別にどうってことはなかった。でも、  
よりによって漆島くんが来るなんて…。

「ほら、いつもの営業スマイルはどうしたんだよJK」

「ここの喫茶店を営む赤羽さんが私に励ましの言葉を掛ける。でも、  
営業スマイルはない気がする。」

「すみません。ちょっと知り合いが来たものですから…」

私はどうにか胸の高鳴りを止めようとしますが、中々止まらなかった。  
た。

「ふうん、そう…。さては、彼氏か？ JK」

にやりと笑いながら訊いてくる赤羽さんに、私は全力で首を横に  
振る。

「ちちち、違いますよ！ ただのクラスメイトですって！」

と、言ったところで私はハツと我に返り、恐る恐る漆島くんの方  
を見る。幸い、私の声は聞こえていなかったみたい。でも、漆島く  
んの性格からして見て見ぬふりしていしそうな…。

「なるほど、要するに肩重いという訳か…」

「うんうんと何度も頷く赤羽さんに、私は突っ込む。」

「違いま って、なんですか！？ 肩重いつて！？」

「気にするな。単に誤植が面白かったから修正しなかっただけだ」  
赤羽さんは時々わけのわからない事を言い出したりする。

「ふむ。要するに片思いの少年が来たので動揺しているわけだな？」

JK

「だから違いますって！！ それと私をJKって呼ばないで下さい  
！！」

確かに女子高生ですけど…。というか赤羽さんが言うと妙に男前  
な気がする。気さくな性格だからかな…。

「ん？ そうなのか…。それは残念だな」

何が残念なのか、私には全く分からなかった。

「じゃあ、私がああ美形少年を落として」

「駄目ですよ！！」

私はぺろりと舌を出して口の周りを舐める赤羽さんを制止する。

「ん？ 別に有華の想い人じゃないんだからいいだろう」

赤羽さんはきよとした表情で私に訊ねる。

「いや、だから、その…。ほら、漆島くんには好きな子がいるかもしれないし、恋愛とかに疎そうな気もするし…。うう…」

何だか、口を開けば開く程余計な墓穴を掘っている気がしてならないよ。私はこれ以上墓穴を掘らないようにする為に一度黙りこくる。

「ほう。つまり、『私が狙ってるんだから横取りしないでよね！』というやつか」

赤羽さんはニヤリと顎に手を当てて格好をつけている。

「違います！！ というか私はそんなキャラじゃありません！！」

と、突っ込みつつも、私は内心赤羽さんの小さな気づかいに感謝していた。やり過ぎな気もするけど…。

「さてと、お約束もこの辺にして…。一応挨拶ぐらいはさせてくれや」

さっきまでのチャラけた雰囲気が消え、何というか、お姉さんのな雰囲気になった。

「あ、はい」

私はいつも赤羽さんのこの雰囲気には驚かされる。やっぱり、何だかんだ言って良い人なのかもしれない。

「んじゃ、行ってくるわ」

赤羽さんはカウンターを出て、漆島くんのもとへと向かった。

「君が漆島くんだね？ 有華からは話を聞いているよ」

突然、さっきの店主らしき女性が声をかけて来た。

「はい。初めまして、漆島朝輝です」

僕はとりあえず自己紹介をする。一応、礼儀ということだ。

「私はこのオーナーの赤羽だ。よろしく」

赤羽さんと名乗る女性は、僕の前に手を差し出す。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

僕はその手を握り返し、握手をする。一瞬、視線を感じた気がしたが、視線を感じた方を見ても誰もいなかった。

「ん？ どうした？」

「あ、いや、なんでもありません」

怪訝そうに訊ねる赤羽さんに、僕は笑って誤魔化し、コーヒーを飲む。

「で、単刀直入に聞くが、漆島くんは有華のことどう思ってるんだ？」

「ゴホッ!？」

コーヒーを飲んでいる最中だった僕は、危うくコーヒーを吹き出しそうになったところをどうにか堪えたが、代わりに気管に入った。

「ゴホッ、ゴホッ。そ、それってどういう」

赤羽さんを見ると、赤羽さんの表情は真剣そのものだった。それを見て僕は「ああ、そう言う事か」と思った。

「月代さんは、僕にとって大切な友達です。今のところは。これからどう関係が変わるか分かりませんが、少なくともずっと彼女の味方である事は断言できます」

ずっと同じ関係のままにいる人間なんて普通はいない。常に関係は変わり続けている。でも、変わらないものが根底にあると僕は信じている。

「そうか…。なら、安心だな」

一度目を閉じた後、赤羽さんはニツと笑って言った。

「んじゃ、これからも有華の事をよろしく頼むよ。漆島くん」

「はい！」

もしかしたら、赤羽さんは学校での月代さんの事を知っていたのかも知れない。でも、僕はそれを訊くことなく返事を返す。

「じゃ、コーヒーぐらいしかないがゆっくりしていつてくれ」

赤羽さんは手をひらひらと振ってカウンターへと戻って行った。  
「赤羽さん、良い人だな……」

赤羽さんみたいな良い人に支えられている月代さんなんだから、きつと大丈夫なのだろうと、僕はそんな甘い幻想を抱いていた。

挨拶が終わったのか、赤羽さんはカウンターへと戻って来た。

「赤羽さん、一体漆島くんと何を話していたんですか？」

若干抵抗があつたものの、私は恐る恐る訊いてみる。

「ああ、漆島くんが有華をどう思ってるかって訊いたの」

「っ!?」

私は思わず息を呑んだ。私が漆島くんにどう思われているかという期待と不安が、私の心臓から全身へと送りだされる。

「それで、漆島くんはなんて……?」

私は恐る恐る赤羽さんに訊ねてみる。

「お前はあいつにとって大切な友達だとき。良かったな」

赤羽さんはニツと笑って優しく答えてくれた。

「友達……」

私は『友達』という言葉初めて聞いた気がした。でも、それは気の所為だった。三坂さんとの一件以来、私は友達を失った。友達は私を見捨てた。それまでの関係だった。でも、漆島くんは違う。そう思うと無性にうれしかった。嬉しすぎて目頭が熱くなる。

「そ、そうなんですか。嬉しいです」

私は赤羽さんに背を向けて率直な感想を述べる。

「おっと、照れ隠しか? 青春だね」

ニヤニヤしているであろう赤羽さんに、私は反論する。

「そんなんじゃないです。ただ……」

「ただ?」

「単純に嬉しかっただけです」

私は笑顔で返答した。ふいに、私の頬に一筋の流れ星が通った。

#### 四日目 土曜日 前半（後書き）

ふう……。書いている内に膨らみ過ぎてしまったので二分割しました。今回はシリアスな展開から外れて、趣味全開のほのぼのとした休日編です。なんか、書いている内に有華のキャラが崩壊してきた気がします。まあ、本当は有華は普通の女の子なのよ、ということにしてください。次回の更新は月曜日になりますが、もしかしたら日を跨ぐかもしれませんがあしからず。それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5312q/>

---

一週間のキセキ

2011年2月6日18時22分発行